

デンマークのポリオ患者における疾病発症率

Nielsen NM, et al : Life-long morbidity among Danes with poliomyelitis. *Arch Phys Med Rehabil* **85** : 385-391, 2004

Key Words : デンマーク, 罹患率, ポリオ

デンマークのポリオ患者における疾病発症率を調査する目的で、コペンハーゲンで 1919~1954 年の間にポリオで入院した 5,421 人と、年齢と性別を一致させた 21,626 人について、1977~1999 年までの疾病発生率比を計算した。ポリオ患者では呼吸器疾患、心疾患、消化器疾患、運動器疾患で入院する危険が 1.2 から 1.3 倍であった。麻痺のあるポリオ患者では、急性期のポリオの重症度と若年での感染がその後の疾病発症率に関係していた。5 歳以下で呼吸管理を必要としたポリオ患者では、呼吸器疾患の疾病発症率比が 7.26、運動器疾患が 4.05、心疾患 1.70、消化器疾患 2.23 であった。麻痺のないポリオ患者でも、特に女性では疾病発症率が増加していた。〔結論〕ポリオの既往は疾病発症率をわずかに増加させた。呼吸筋麻痺のあったポリオ患者では疾病発症率は高いが、後遺症が残らなかった患者においても疾病発症率が増加していた。

(横浜市立大学 栗林 環)

改訂版 CTSIB (Clinical Test of Sensory Interaction and Balance) の時間バランス得点に対する靴装着の影響

Whitney SL, et al : The influence of footwear on timed balance scores of the modified clinical test of sensory interaction and balance. *Arch Phys Med Rehabil* **85** : 439-443, 2004

Key Words : バランス, 姿勢, 靴

改訂版 CTSIB の時間バランス得点に靴装着の有無が影響するかどうか、また、重心動揺計を用いた感覚統合テスト (Sensory Organization Test ; SOT) との相関、感度、特異度が靴の有無で異なるかどうかを明らかにするため、外来で前庭運動療法を受けている 30 名 (平均年齢 63 歳) のバランス障害患者について前方視的研究を行った。方法は、全ての患者に裸足、靴装着で改訂版 CTSIB 評価を行い、結果を比較した。また、16 名に SOT も裸足、靴装着で比較した。〔結果〕裸足と靴装着で改訂版 CTSIB の結果に有意な差はみ

られなかった。改訂版 CTSIB と SOT の間には裸足、靴装着とも同様の相関がみられた。CTSIB の感度、特異度とも靴装着の有無で差がなかった。〔結論〕改訂版 CTSIB は裸足で行うと規定されているが、靴を装着したままでも評価できる。CTSIB は靴を装着したままでも同様の結果が得られるので、外来で、より簡便に検査することができる。(横浜市立大学 水落 和也)

外傷性脳損傷患者に対する Useful Field of View Test の有用性

Calvanio R, et al : Acquired brain injury, visual attention, and the useful field of view test : a pilot study. *Arch Phys Med Rehabil* **85** : 474-478, 2004

Key Words : 外傷性脳損傷, 神経心理学的評価, 視覚的注意障害

〔目的〕外傷性脳損傷患者の注意障害に対する評価法としてコンピュータモニタ上の注視を用いた Useful Field of View (UFOV) テストがある。このテストが従来の神経心理学的テストと比較して有用であるかをみるために研究を施行した。〔方法〕対象は米国のリハビリテーション専門病院に入院した外傷性脳損傷患者 15 名である。評価として UFOV テスト、FIMTM、入院期間、標準的な神経心理学的テストを施行した。〔結果〕UFOV テストの細項目は、視覚的注意に関する神経心理学的テストと強く相関していた。また、個々の患者の UFOV テストの変化は入院期間、FIMTMと相関していた。〔結論〕UFOV テストは視覚的注意の評価に有用であり、またリハビリテーション専門病院における入院期間や ADL の変化と相関していた。UFOV テストは、他の標準的な神経心理学的検査に比較して検査時間が短時間で済む利点もあり、外傷性脳損傷患者に対する注意障害の評価として、簡便で有用であることが証明された。(横浜市立大学 菊地 尚久)

遅延性低酸素脳症：症例報告と文献的考察

Custodio CM, et al : Delayed postanoxic encephalopathy : a case report and literature review. *Arch Phys Med Rehabil* **85** : 502-505, 2004

Key Words : 遅延性低酸素脳症, 症例報告, パーキンソン症状

遅延性低酸素脳症は主に一酸化炭素中毒後にみられる疾患であるが、無酸素・低酸素の既往があつて、臨

床的に完全に回復したようにみえた後に、突然に無感情、混乱、動揺などの感情障害が神経症状を伴って生じる疾患である。今回われわれは呼吸不全による低酸素状態の11日後にリハビリテーション病棟に入院した51歳女性の症例を経験した。入院時には、日常生活上ごく軽度の阻害因子となる程度の認知障害および視覚障害を認めていた。入院2日後に突然、急速に増悪するパーキンソン症状と両下肢痛が出現した。疼痛の増悪もあり、さらに2日後には歩行不能、ADL全介助の状態となった。遅延性低酸素脳症と診断し、抗パーキンソン剤、理学療法、作業療法を施行したが、最終的にも障害が残存した。本症例は入院リハビリテーション中に突然発症した遅延性低酸素脳症であるが、今後、無酸素・低酸素の既往があり、リハビリテーションを行っている症例には本疾患の発症に留意して対処する必要があると思われる。

(横浜市立大学 菊地 尚久)

片麻痺患者の腓腹筋痙性治療を目的とした 脛骨神経運動枝に対するアルコール神経ブロック

Jang SH, et al : Alcohol neurolysis of tibial nerve motor branches to the gastrocnemius muscle to treat ankle spasticity in patients with hemiplegic stroke. *Arch Phys Med Rehabil* **85** : 506-508, 2004

Key Words : 神経ブロック, 脛骨神経, 片麻痺

〔目的〕足関節底屈の痙性治療として、脛骨神経運動枝の選択的神経切断術や直視下神経ブロックの効果が報告されているが、経皮的神経ブロックの報告はない。脳卒中片麻痺患者における脛骨神経運動枝の神経ブロックについて、効果を評価した。〔対象〕足関節底屈の痙性がMAS $\geq$ 2、かつ、この痙性により立位、歩行能力が制限されている片麻痺患者22人で、男性17人、平均年齢48歳、発症後平均4.7か月であった。〔方法〕腓腹筋を支配する脛骨神経運動枝を電気刺激にて同定し、50%エタノールでブロックする。効果測定は足関節のMAS、クロウヌスコア、背屈の他動可動域にて行った。〔結果〕治療後6か月時点で77%にMASの改善がみられた。各測定値の平均は6か月時点で統計学的有意に改善していた。この間、重篤な合併症はみられなかった。〔考察〕腓腹筋の脛骨神経運動枝ブロックは足関節底屈の痙性治療に有用かつ安全な方法である。

(横浜市立大学 大西 正徳)

神経因性の過活動性膀胱に対する膀胱注入療法

Reitz A, et al : Intravesical therapy options for neurogenic detrusor overactivity. *Spinal Cord* **42** : 267-272, 2004

Key Words : 膀胱, 神経因性, 薬物療法, 膀胱内注入, 抗コリン剤, カブサイシン, ボツリヌストキシン

局麻剤：リドカインが粘膜に作用し容量を増大させる。作用時間短い。バニロイド：求心性線維に作用する。カブサイシンもresiniferatoxinもバニロイドである。カブサイシン：前もってリドカインを注入、疼痛緩和が可能である。効果は6か月持続、繰り返しても効果や作用期間は変わらない。resiniferatoxin：疼痛に働く神経に作用しない。3~12か月効果が持続する。nociceptin/orphaninFQ：神経ペプチドである。膀胱容量増加、排尿筋活動閾値を上げる働きがあり、2週間の作用持続期間である。アトロピン：遠心性線維遮断作用がある。無抑制収縮時の最大膀胱内圧を下げ、反射が開始されるまでの容量を増大させる。6時間程度の効果持続時間と考えられる。オキシブチニン：局所麻酔作用と抗コリン作用がある。小児に対しても安全で効果的という報告がある。ボツリヌストキシン-Aの排尿筋内注射：膀胱排尿筋内に注射する。反射開始までの容量が増加、最大膀胱容量も増大、最大膀胱内圧は低下した。36週経過して作用は持続している。小児にも同様の効果を認めるが、効果は6か月ほどである。〔まとめ〕薬剤の膀胱内注入は、経口に代わる治療になりうる。治療の標的選択性や副作用軽減という利点がある。resiniferatoxinやボツリヌストキシン-Aによる治療は有望である。

(市川市リハビリテーション病院 小川 真司)

高い強度の抵抗訓練は脳卒中長期生存者の筋力、 自己報告による機能、能力障害を改善させる

Ouellette MM, et al : High-intensity resistance training improves muscle strength, self-reported function, and disability in long-term stroke survivors. *Stroke* **35** : 1404-1409, 2004

Key Words : 訓練, 脳血管障害, 機能回復

この研究は、高齢の脳卒中長期生存者の下肢筋力、機能および能力障害に対する監視下での高い強度の漸増性抵抗性訓練(PRT)の効果を評価するために行われ

た。軽度から中等度の脳卒中の既往が一度だけある 50 歳以上の 42 人のボランティアが、上肢ストレッチングを行う対照群と、両下肢のレッグプレス運動、麻痺側および非麻痺側の片側膝伸展、足関節背屈、足関節底屈運動より構成される 12 週間の PRT プログラムを受ける PRT 群に無作為に割り振られた。機能的パフォーマンスが 6 分間歩行、階段登りの時間、椅子からの繰り返し立ち上がり時間、常習的な歩行速度および最大歩行速度によって評価された。機能と能力障害の変化における自己報告が、高齢者の機能および能力障害評価表を用いて行われた。介入前の機能的なパフォーマンスにおいては、群間の有意な相違を認めなかった。介入後では、1 回の運動における最大筋力の測定で、対照群では変化がなかったのに対して、PRT 群ではレッグプレス運動で 16.2%、麻痺側膝の伸展運動で 31.4%、非麻痺側膝の伸展運動で 38.2%の筋力増加がみられ、統計学的に有意であった。また、麻痺側の足関節背屈では PRT 群で 66.7%の増加に対し、対照群で 24.0%の低下、麻痺側の足関節底屈では PRT 群で 35.5%の増加に対し、対照群で 20.3%の低下、非麻痺側の足関節背屈では PRT 群で 14.7%の増加に対し、対照群で 13.8%の低下と、対照群に比較して PRT 群で有意な改善が認められた。機能と能力障害の変化における自己報告では、対照群では変化がなかったのに対し、PRT 群では統計学的に有意な改善が認められた。高い強度の PRT は、脳卒中後の麻痺側および非麻痺側の下肢筋力を改善させ、機能的な制約や能力障害の減少をもたらす。

(弘前大学 岩田 学)

乳癌治療からの回復期間中の上肢における 問題への理解

Collons LG, et al : Perceptions of upper-body problems during recovery from breast cancer treatment. *Support Care Cancer* 12 : 106-113 : 2004

Key Words : 乳癌, 上肢可動性, リンパ浮腫

近年、乳癌治療後の上肢機能制限についての認識は改善しつつあるが、術後長期間にわたり機能制限と苦痛を引き起こしている。早期治療や治療方法の改善により、長期間生存例が増えているが、治療後の患者から、長期経過での治療効果判定やリハビリテーションの必要性が訴えられるようになっている。本研究は、乳癌治療後患者の日常生活上の認識について調査し、検討する目的で行った。乳癌専門開業医に通院中で、18 か月以内に乳癌の手術を受けた 24 名の女性により、治療前後での日常生活上の困難さ、上肢リンパ浮腫、リハビリテーション等 10 項目についてグループディスカッションを行ってもらい、その結果を分析した。乳癌術後に通常の日常生活活動に戻るまでの過程は、患者、医師の予想よりも長期間であると感じており、上肢による日々の作業での困難さが多く報告され、身体的影響により徐々に自分の病状に気づき、以前のような能力への改善が難しいのではという心理的な不安を引き起こしていた。リンパ浮腫になる、またはその危険性があるということは、ほぼ全ての女性にとって大きな苦悩だった。理学療法がさらなる機能低下や浮腫を予防するという役割は、この検討のなかで強く強調されていた。臨床に関わるものは、乳癌では治療後長期間にわたり上肢機能の問題を起こす可能性があり、回復と機能低下を予防するために努力が必要と認識することが必要である。

(弘前大学 細川賀乃子)